

阮光碧——ベトナムの心性と劉永福伝奇（下）

林 正子

はじめに

- 一 マンダリンと匪——漢字文化圏ベトナム
 - 二 マンダリンと匪の師弟——阮光碧の贈詩（以上前号）
 - 三 マンダリンから匪へ——阮光碧（以下本号）
 - 四 匪もマンダリンも越えて——劉永福の唱和
- 小 結

三 マンダリンから匪へ——阮光碧

一八六九（嗣徳三二）年の進士出身の正統マンダリンとして阮光碧が任地としたのは、臨洮をふりだしに山西、興化という北圻（北部ベトナム）である（別表「上・六七頁」および図1

参照）。山西、興化は宣光とともに三宣提督の管轄下にあるため一八八一（嗣徳三四）年以後は、劉永福および清軍と共同してフランスの侵略にたいする防衛にあたることになった。

北圻には当時、清朝に敗れた太平天国、蜂起に失敗した天地会、反乱を起こした兵士などが越境していた。嗣徳帝は「清地股匪」討伐に苦しみ、清朝に共同討伐を要請した。^①清朝もまた「中国の生命線」^②とみなしていた北圻を反清基地とするわけにはいかず、一八六九年の馮子材將軍の派遣をかわきりに一八八一年までに広西軍を前後五回にわたって送った。^③すでに南圻（南部ベトナム）を直轄植民地としたフランスは、雲南との通商をねらい紅河をさかのぼる航路確保をめざした。フランスは教民（ベトナム人カトリック教徒）や越境中国人とも結び勢力の拡大をはかり、黒旗軍とラオカイ（保勝）を争って敗れた黄崇英の黄旗軍もフランスに支援されていた。ベトナム人と少数民族の

社会に越境中国人とかれらを追う清軍、北上するフランス人が
闖入して混乱がはじまった。

北上するフランス軍にたいしては紙橋の戦い（一八七三年）
が転機となり、以後ベトナム側の攻勢がつづいた。劉永福の起
用はフエ宮廷の命令ではなく地方の将官によるものであり、そ
の中心人物としては黄佐炎が推定されている⁽⁴⁾。黄佐炎は嗣徳帝
の女婿で武官として名高い。フランスへの抵抗戦では論功行賞
をめぐり劉永福を掣肘したが、清朝からはベトナム側の勇將と
して認められている。『大南寔録』によれば阮光碧を興化山防使
に推挙したのは、黄佐炎である。黄佐炎は阮光碧のもつ軍事方
面の才能をみいだしたが、その目に狂いがなかったことは推挙
の七年後に証明された。すなわち清軍の進駐がもつ重要性を、
阮光碧は正確に読み取ったのである。

一八八二（嗣徳三五）年興化山防使・巡撫阮光碧は、「清人が
来て北圻を爭取して自らを守る計とする」という北圻の住民の
流言を上奏した⁽⁵⁾。住民達は「フランス軍によるハノイ落城によ
って清朝が両広、雲南軍を大量に派遣する」という情報が意味
するものを、「清朝は北圻を生命線とみなし経営をはかっている」
と読み取ったのである。その背景には中国から侵略された歴史
があり、近くは黎朝回復を大義名分にかかげる乾隆帝の侵略が
あった。しかし、嗣徳帝は、「小人の心をもって君子の腹を量る
とは。清人はそのような不義の挙をするだろうか。惑わされて

はいけないと住民を諭せ」と叱責し、さらに「もし清軍が来た
ならば道案内をして心からもてなせ」と命じた。翌年以降フラ
ンスの北圻侵攻が本格化すると嗣徳帝は、劉永福の阮朝と清朝
への両属を利用して清軍とともに切り捨てをはかる狡猾さも持
ち合わせていた。戦場である北圻の住民の危機感も地方官の防
衛使命感も、阮朝存続のまえには問題にされなかった。

阮光碧のするどい軍事感覚は、嗣徳帝の命令で黄佐炎と共に
官兵をひきいて「土匪」掃討に出動する等の公務遂行でやしな
われた。山岳地帯をふくみ少数民族、越境中国人とも折衝する
任地で、地理のみならず人心をしっかりと把握して国土防衛の
重要性を認識した。その知識は身をもって獲得したという点で
劉永福と共通する。興化落城以後の行動は、マングリンとして
得た情報や人脈を救国のために活用しつくしたものといえよう。

さて、劉永福の根拠地であるラオカイは、フランスにとつて
は雲南への入口であり確保が急がれた。ラオカイを得るため
は中国人武装集団・黒旗軍の移動が必要である。劉永福が阮朝
に帰順すると、黒旗軍も団練の「劉団」として『大南寔録』に
記載された。同時に「劉団移駐」も一八七七（嗣徳三〇）年か
ら問題とされている。フエ宮廷は、フランスと劉永福の衝突を
きらいラオカイから「劉団」を離す策をさぐった。そのため
は劉永福に一府あるいは一県を領させ「世爵も可」とした⁽⁶⁾。代
替地を与えることでフランスの要求を満たそうというわけである。

嗣徳帝が提示したのは、代替地の支給、開墾権、鉞山開発権といった破格の気前のよいものであった。しかし、劉永福は拒絶した。商路からはずれた代替地への移駐拒否の理由はつぎのとおりであった。「われわれは農民ではない。鉞山開発には知識と技術がいる。われわれに出来るのは通商をコントロールして厘金をとることだ。」⁷⁾劉永福の回答からは、理性的な現状分析とともに理財の才が読み取れる。劉永福はラオカイを離れずフランスの侵略に抗戦をつづけ、李・ブルーレ協定でラオカイ開港が日程にのぼった一八八二（嗣徳三五）年に至っても、移駐問題は膠着したままだった。

翌一八八三（嗣徳三六）年にはいると、嗣徳帝が一笑にふした北圻の流言は現実のものとなった。この年の第二紙橋事件の結果、フランス議会は増援軍の予算を可決してベトナム侵略を本格化した。⁸⁾極東艦隊艦長クルベが派遣され、陸海軍の攻撃は北圻の戦況を一変させた。フランスの攻撃にたいして清朝はフランス軍の分断をはかるため、雲貴総督岑毓英と雲南軍を投入し馮子材とともに東西の戦線を展開させた。⁹⁾さらに唐景崧を特派して、劉永福を利用しフランスに対して優勢にもちこむことも試みた。

唐景崧は、進士出身のマンダリンとして清流派の張之洞のひきもあり、雲貴総督岑毓英のもとで劉永福の籠絡にのりだした。一八八三年のことである。黒旗軍を傭兵として戦闘の表面にた

たせて、清軍はあくまで背後で支援する形をつくるのが目的である。かれは、劉永福を匪から救国の英雄へと転身させた功労者として現在も高く評価されている。しかし、劉永福にたいする初対面の印象および後年の台湾戦役での対応からみると、通説は説得力に欠けるといえよう。

唐景崧は初対面の印象を「瀏亭、字を識らず」、「瀏亭、長身削立、高顴尖頰、状類獐猿」と記す。この時の劉永福は

中国遊撃銜捐二品封典・越南三宣副提督劉永福率親兵隊、乘舟至山西。旗純黒、有三宣提督軍務旗、篆書劉字旗、七星旗、八卦旗、洋槍、刀斧。手角声烏烏、馬蹄蹴踏。不聞軍嘩、市人謹呼、劉提督來。¹⁰⁾〔句点は筆者〕

とあるように、両属のマンダリンとしての威儀をととのえて登場している。確かに写真や後の日本軍による人相書きの劉永福は「頬骨が高く、顎は小さく尖っている」。しかし、「大猿」の譬えは、マンダリンとしての威儀と黒旗軍の威容とを背景にするだけにいっそう唐景崧の劉永福にたいする侮蔑を思わせる。

劉永福説得に使われた有名な三策は、上策は自立して王となる、中策はベトナム・マンダリンとしてフランスを攻撃する、下策はラオカイを死守する、というものである。中策に現実性をみて劉永福が救国へと発奮したのは、この献策によるといわれる。しかし、世爵案はすでに阮朝も考慮しており、説得にあたる相手を「大猿」視した唐景崧が劉永福を人格的に傾倒させ

傭兵から救国の士に転身させた、と考えるには無理がある⁽¹¹⁾。

阮光碧にたいして唐景崧は、「老成、談ずべし」と評している⁽¹²⁾。ベトナムに到着以来、筆談で阮朝マンダリンと対話してきた天朝のマンダリン唐景崧が、自己と同等視したうらには阮光碧の漢学の素養がある。阮光碧の記す劉永福像の「不学、不知保身」の前半は、唐景崧のいう「不識字」と一致する。しかし、阮光碧は「文字を識らない」ことが官界への不適應をもたらしたマンダリン失格の危険をはらむと惜しむのにたいして、唐景崧の「大猿」という表現は獸類と読みかえたことを意味し、両者の人となりの違いを鮮烈にあらわしている。

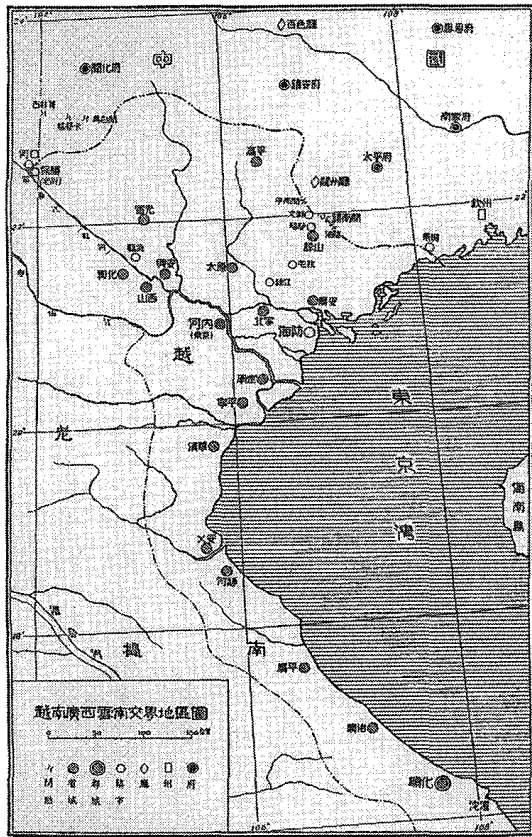
一八八三年五月一九日の第二紙橋事件の勝利以後、懷徳、丹鳳、山西とつづく戦いでは黒旗軍と清軍、阮朝軍との統一戦線はもはや存在しなかった。士気はあがらず、二つの王朝はフランスに対抗するためにただ劉永福の「名声」に頼るのみだった。両属の劉永福は苦戦をしいられた。フランス軍を恐れさせた黒旗軍の勇猛さは、兵士の喪失となつてはねかえった。兵士の補充、武器弾薬の充実、砲台の構築、給与と食料等あらゆる点で軍需をみただけの資金に事欠いた。両王朝の与える軍資金や賞金では賄いきれなかった。劉永福は、阮光碧を中心とする少数のマンダリンと住民にささえられて反フランスのゲリラ戦を展開しつづける。山西ではフランス軍を苦戦させたものの、興化ではすでに黒旗軍の精鋭の大部分をうしない落城を救うこ

とはできなかった。

興化は、図1にみるように山西、宣光と三角形をなしハノイから紅河をさかのぼりラオカイに至る要衝である。山西では竹藪の援護にたすけられ縦横の攻撃をした黒旗軍も、遮蔽物のない興化の平原では勝手がちがひ苦戦においこまれたと、フランス側は指摘している⁽¹³⁾。興化の戦いに、フランスはアフリカ部隊を投入し黒旗軍の殲滅をはかった。ベトナム人狙撃兵、ゼフィール（アフリカ懲罰部隊）、外人部隊に教民をくわえて北圻を制圧していった⁽¹⁴⁾。

唐景崧は清軍の統領として総統黄佐炎とともに防衛にあたり、黄佐炎は劉永福を派遣し支援させた。興化落城の経過を『大南寔録』はつぎのように伝える⁽¹⁵⁾。

〔二月〕十三日三宣提督劉永福帶將団練自興〔化〕抵北屯。十五日早、法兵与清兵交戦于桂陽地轄、未分勝負。是午、法兵向清營兵放氣毬、頃即收軍回船。晚分、法官忽縱兵再来兜戰。清營兵多被傷斃、抵敵弗支各潰。於是併与現住省城諸營兵皆潰散、退回太原、諒山。劉團亦退回興化（該團此来与清官不合、不曾有援剿何陣）。……法官既入北寧城。……三月。……於是月進攻興化。清雲貴總督岑毓英以興化戰場不可居、揭飭統領丁槐、馬桂等諸營回守內地。総統黄佐炎亦拔芳膠屯（近省城）。佐炎前回熟練、近摘次兵進住是屯）、復回熟練。署巡撫阮光碧以大兵移住、恐礙



【図1】「越南・広西・雲南交界地区図」
 (『中国近代史資料叢刊 中法戦争』1
 付図)

商請劉團率部來護。十三日法兵抵省城。省臣移住城外。・・・十四日劉團与法兵交戦、未分勝負。・・・十七日法官遂入城。・・・事聞。・・・原山次省臣黃佐炎、梁思次、吳必寧、阮廷潤、並興省阮光碧等各準回京候旨。既而光碧（二甲進士、南定程浦社人）委人納印、潛向上游。欲往清国（与家人書永訣）不果。尋卒于該省山分。佐炎帶將次兵、回抵広平、奏納印節、仍留家貫。思次、必寧、取次回京。廷潤、往清国（同慶二年、同原諒撫呂春蔵回河内、由経略使衛呈寔引、向法官商妥、付回家貫）。阮文甲（原山西布政）、阮善述（原山次賛襄）、各別去。〔句点は筆者〕（一）は原注、〔一〕は筆者の補

一八八四年の旧曆二月中旬から激化する興化攻防は月をこえた。劉永福、岑毓英、黄佐炎の足並みはそろわず、阮光碧は黒旗軍の救援に望みをかけたが、旧曆三月十七日にフランス軍が勝利して入城をはたした。興化陥落の報告をうけた嗣徳帝は、落城の責任者として黄佐炎、梁思次、吳必寧、阮廷潤、阮光碧にたいしてフエに帰還して処分をまつように命じた。責任を問われた各マンダリンのその後の道は、反フランス運動に加わるか否かに分かれた。阮光碧は官印を人に託して去りフエへの帰還命令にしたがわなかった。

『大南寔録』は未帰還マンダリンとして阮光碧、阮廷潤、阮文甲、阮善述の名をあげる。そのなかで阮光碧についての記述は特異である。阮光碧の死没は落城の六年後であるにもかかわらず記され、さらに「二甲の進士 南定の程浦社人」と出身と本籍をあきらかにしたうえで「永訣の書を家人にあたえた」と注をくわえている。「清国に往かんと欲して果たさず。尋で興化省の山分で卒す」とあるのは咸宜帝の国書進呈使として雲南へ派遣されたこと、起義の指導者となったことを暗示する。さらに阮文甲と阮善述（尊室説の岳父）については「別れて去る」と特記しており、きわめて婉曲にフランスに膝を屈しなかったタイバック起義の参加者を顕彰している。

周知のように興化落城の後におこった「バクレの衝突」で清朝とフランスは、清仏戦争に突入していく。劉永福のゲリラ戦

はつづき、清軍も東部戦線で馮子材がランソン（諒山）を奪回する勝利をあげたが、清朝は天津条約をむすびフランスと講和し戦争は終わった。李鴻章は郡県である台湾を重視して、フランスが占拠していた澎湖島の返還条件とした劉永福と黒旗軍の帰国を認めた。劉永福の帰国は、両広総督張之洞によって強制されていった。帰国後の劉永福について述べる前に以下、落城後の阮光碧の行動をおってタイバック起義についてみていきたい。

興化落城日を命日とさだめて阮光碧は反フランス運動に身を投じた。官印返還はマンダリンから「民」への帰還ではなく、阮朝ばかりでなくフランスにとつても一足飛びの「匪」への越境を意味した。阮朝にたいしては「許国」（国のために身を捧げる）を、フランスにたいしては「復大法書」をかかげて救国活動にはいった⁽¹⁶⁾。すなわち同慶帝にたいしては「君よりも国を重しとする」と主張し、投降を勧告するフランスにたいしては同慶帝傀儡政権を認めず侵略に抵抗することは、「罪を一時に得るとも万古に残さず」と正当であることを論じた。その論旨は儒学のみならず国際法への理解を示しており、後の潘佩球の「外務大臣小村寿太郎宛書簡」へとつながるものである⁽¹⁷⁾。

このように匪として反フランス運動の世界に登場した阮光碧はタイバックで、文紳と少数民族の混合組織をつくった。正統の君主である咸宜帝の国使として雲南に国書を二度とどけたが、北京にうけいられることはなかった。一八八五（咸宜元）年

の天津条約で清朝は阮氏の越南王国をすてた。ベトナムとはフランス領インドシナ連邦であった。かつての三宣提督の管轄地は、オート・トンキン（Haut-Tonkin）として代牧区に編成された。阮光碧はわずかに雲貴総督岑毓英の個人的友誼による軍需援助をひきだしたにすぎず、屈辱をあげわい使命は失敗におわった。帰国後、戦いをつづけた阮光碧は病に倒れて夢をみる。「五十万の雄兵をひきいて北から將軍がくる」という夢を語り、一八九〇（成泰二）年に五十八歳で生涯をとじた⁽¹⁸⁾。

阮光碧を失なった後のタイバック起義をひきいたのは、タイ族のデ・キエウ（提翹）とドック・グー（督呉）である⁽¹⁹⁾。阮光碧、阮文甲から戦いをひきつぎ、少数民族と連帯してフランス軍の北圻侵略に抵抗しつづけた。ドック・グーのたくみなゲリラ戦は、パリ外国宣教会の宣教師に恐れられ記録された。

フランス軍および教民とともにフランス支配を拡大してきたパリ外国宣教会にとつて劉永福は、反フランス運動の象徴であった。ラオカイに教会をたてることは、宣教の成果であると同時に祖國フランスの勝利を具体化するための絶対目標とされた。ラオカイの支配に成功すると中国人の廟の真向かいを選んでサクレール・チャペルがたてられた。チャペルは駐屯部隊のためには不可欠であり、ラオカイの教会はフランス軍に捧げられた教会であった。一八九四年六月二一日、洗礼者ヨハネ記念日にミサをあげた宣教師は「フランス」の勝利を宣言した⁽²⁰⁾。フラン

ス領インドシナ連邦成立から七年後のことであった。

四 匪もマンダリンも越えて——劉永福の唱和

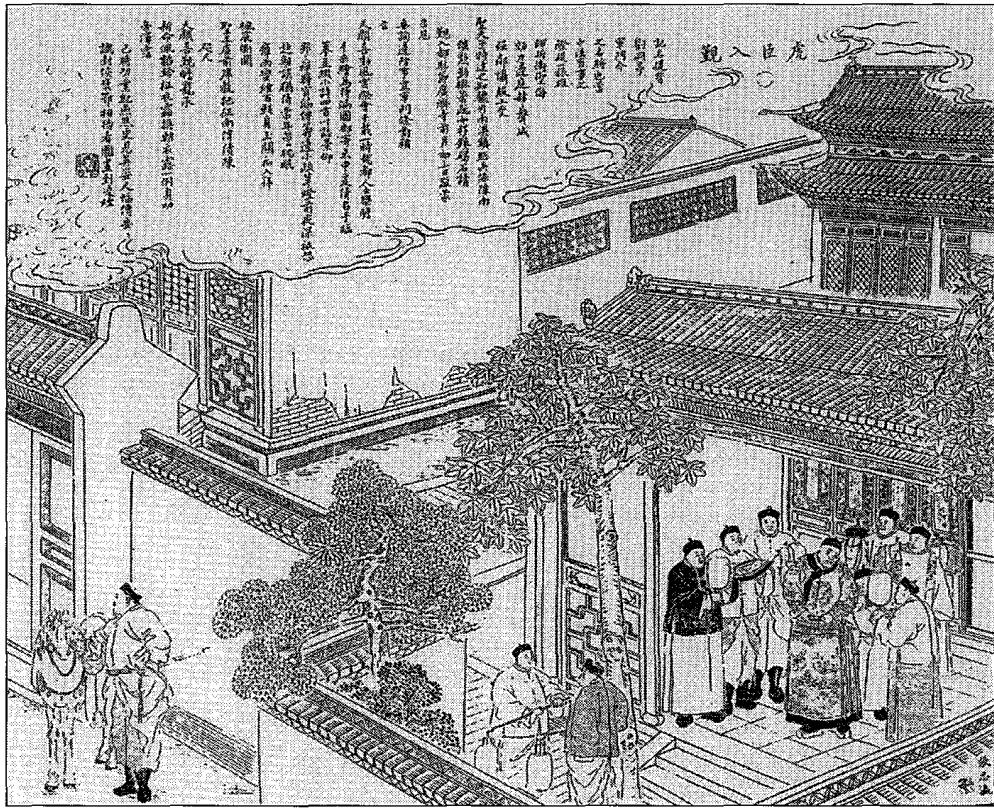
以上述べたように、劉永福が阮朝、清朝に両属する傭兵から義兵——侵略者にたいする抗戦へと転生するのを可能としたのは、阮光碧とのベトナムにおける師弟関係であった。戦いの目的は生活維持から「救国」へと昇華した。では、劉永福が阮光碧にあたえたものは何か。それはベトナム人の「匪」としてのあくまでも民衆の視点に立った戦いの継続、ゲリラ戦の作戦と技術ではないか。

フランスが恐れたのは「劉永福」「黒旗軍」の名声であった。しかし、一八八五年以後の反フランス運動をつづけたのは、ベトナム人である。一八九〇年五月一九日にドック・グーは、興化近郊のクワンナップでゴックタップ駐屯所長エヘルを殺害した。事件がリヴィエール少佐が黒旗軍に屠られた第二紙橋事件と同じ日であったことは、パリ外国宣教会宣教師の肝を冷やさせた。たくみな戦術でフランス兵士を倒したことは、劉永福の再来を思わせた。ドック・グー等のタイバック起義に直面した一宣教師は「劉永福なしにベトナム人は侵略に抵抗できると認めざるをえなかった⁽²¹⁾」。

さて、ベトナムからの帰国は劉永福が「正真正銘の清朝マン

ダリンとなった」印であるという説は、現在も支持されている⁽²²⁾。一八八五年以後の劉永福の死命を制したのは張之洞であった。張之洞は、進士出身の探花から翰林院という出世コースをたどり、清流派であり対外強硬派として知られていた。張之洞は唐景崧のベトナム派遣を実現させ、劉永福を清朝護持のための反フランス戦力として利用することをめざした。帰国にさいしては黒旗軍の兵士を削減し、劉永福の武器をふくむ資産の搬出をゆるさなかった。居住地として馮子材將軍の馮氏一族が牛耳る広東省欽州を指定した⁽²³⁾。さらに両広総督としての張之洞の工作はすすむ。広東水師提督方耀が北京で光緒帝に拝謁する機をのがさず、劉永福の拝謁も実現させた。劉永福の北京入りのニュースは民衆に歓迎された。上海発の「劉永福は皇帝に拝謁して親しくベトナムの戦況を報告した」〔図2〕という『点石齋画報』の記事は、その表れである。劉永福は、北京マンダリンへの贈り物をととえるために汽船一艘を売り払って費用を捻出しなければならなかった⁽²⁴⁾。しかし、光緒帝の対応は通り一遍であり、得るところなく帰還した。

皇帝への拝謁が広東出身者にとって言語不通のために無意味となった例がある。百日維新の際の梁啓超の体験である。論客の梁啓超と親政に意欲をもやす光緒帝とですら意思疎通はかなわなかった⁽²⁵⁾。まして自身では「虎」一字が書けるのみであり、贈り物が象徴する官界の習慣にそまらない劉永福への官廷や北



【図2】「虎臣入観」(『点石斎画報』)

京マンダリンの対応は想像できよう。さきにベトナムで阮朝と清朝双方のマンダリンと対立して排除された者が、北京で雪辱できるはずはなかった。清仏戦争の功勞によって唐景崧が台湾道に昇進したのたいして、劉永福は戦後二十年間も総兵にとどまった。マンダリンとしての劉永福は、清朝にとって傭兵あがりの官海の一つの泡にすぎなかった。

官海の泡の一つから皇朝の忠臣へと清朝の劉永福認識をあらためさせたのは、十年後に勃発した日清戦争である。⁽²⁶⁾ 日本軍が遼東で猛攻を開始すると、清朝は父祖の地であり北京の後背地を守るために、唯一の近代戦の勝利者として劉永福を評価して、急遽台湾防衛の任務をとき遼東派遣の命をくださった。清朝は起死回生の金丹として劉永福に期待した。劉永福は「サトウキビ畑では戦えてもコーリヤン畑では戦えない」と述べて抗命した。ここには故郷の広東からみて北圻、台湾のもつ地理のみならず言語、風習の距離感の近さにくらべて東北の遠さが表明されており、きわめて合理的である。遼東での抗戦を拒否したものの劉永福は、台湾防衛をまっとうできなかった。

一八九四年、幫辦台湾防務閩粵南澳鎮總兵として劉永福は、台湾巡撫唐景崧と再会した。その前年に唐景崧は『請纓日記』を台湾布政使衙門から刊行し、清仏戦争における勲功の普及につとめている。同書の序を弟子の邱逢甲が書いているように、台湾の郷紳、マンダリンに過去の栄光に拠って君臨していた。

劉永福についてはかつて戦略で「自家薬籠中のものとした」と自認していた。

台湾に登場した黒旗軍は、再三の縮減策の結果として編成されたもので戦力としては新兵とかわりなかった。十年前、劉永福の絶頂期の威容を「大猿」と評した唐景崧が、巡撫という地方級マンダリンの頂点を占める一方、一介の総兵のままの劉永福にたいして不遜であったことは推測できよう。台湾防衛の一本化を主張する劉永福をおさえ、南北分守と称して自らは台北にとどまって全権をにぎった。

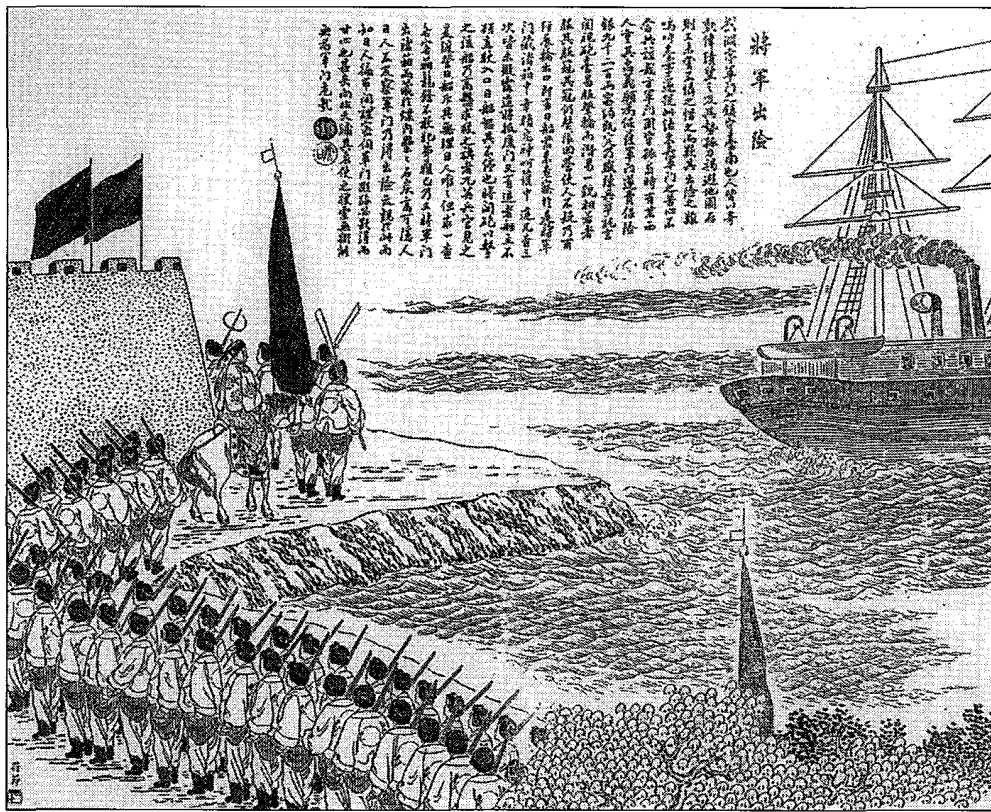
官界での成功をもたらした過去に酔っている唐景崧には、漢字文化圏から出発した日本が自国の独立をたもつためアジアの他民族を犠牲にするという発想にいたっていることを理解できなかった。唐景崧にとっての台湾は、マンダリン経歴の一点にすぎなかった。

下関条約がむすばれ台湾割譲式がすむと、台湾戦役がはじまった。台湾住民は、最高行政官である唐景崧を総統として一八九五年五月二五日に台湾民主国を宣言して徹底抗戦の構えをみせた。しかし、六日後に唐景崧は清朝の官員引き上げ令をふまえて公金を横領してアモイに去った。六月七日、日本軍は台北に無血入城し、義兵を殲滅しつつ北白川宮の近衛師団は南下をはじめた。福沢諭吉は義兵を「烏合の衆」ときめつけて、台南の劉永福を倒せば抗日戦争は瓦解するとみた。

台湾民主国の存続期間については諸説ある。もつとも長いものは、一〇月一九日に劉永福がアモイに去った時を終焉として三か月余りとする。台北の民主国が瓦解したあと劉永福は総統の地位を固辞してうけなかった。戦闘能力からいえば、黒旗軍は少数であり新募の兵士が中心であった。台湾住民の義兵は奮戦したが統一戦線はくめなかった。兵器や資金からいえば、かつて清仏戦争で義兵を組織して先頭にたった豪紳——台北の林氏、台中の林氏は大陸に去って事態を傍観した。清朝マンダリンはといえば、両江総督張之洞に代表されるように口約束はするが実質的な支援は拒否した。台湾を去る時に劉永福がもらしたという「内地の諸公が我を誤り、我も台湾住民を誤った」という慙愧の一言は重い。イギリス船に潜み公金横領の汚名をきいて、劉永福はアモイについた。⁽²⁷⁾ 阮光碧の危ぶんだ「保身」に失敗した結果であった。

しかし、台湾の敗北を共和制＝自主独立のため住民のための戦いと読み取った上海情報は、「堂々の部隊をひきいて帰国した將軍」〔図3〕としての劉永福像を流布した。⁽²⁸⁾ 劉永福伝奇の一齣である。中国民衆は、劉永福の救国の志がけっして挫けていないことを図像としてとどめたのである。

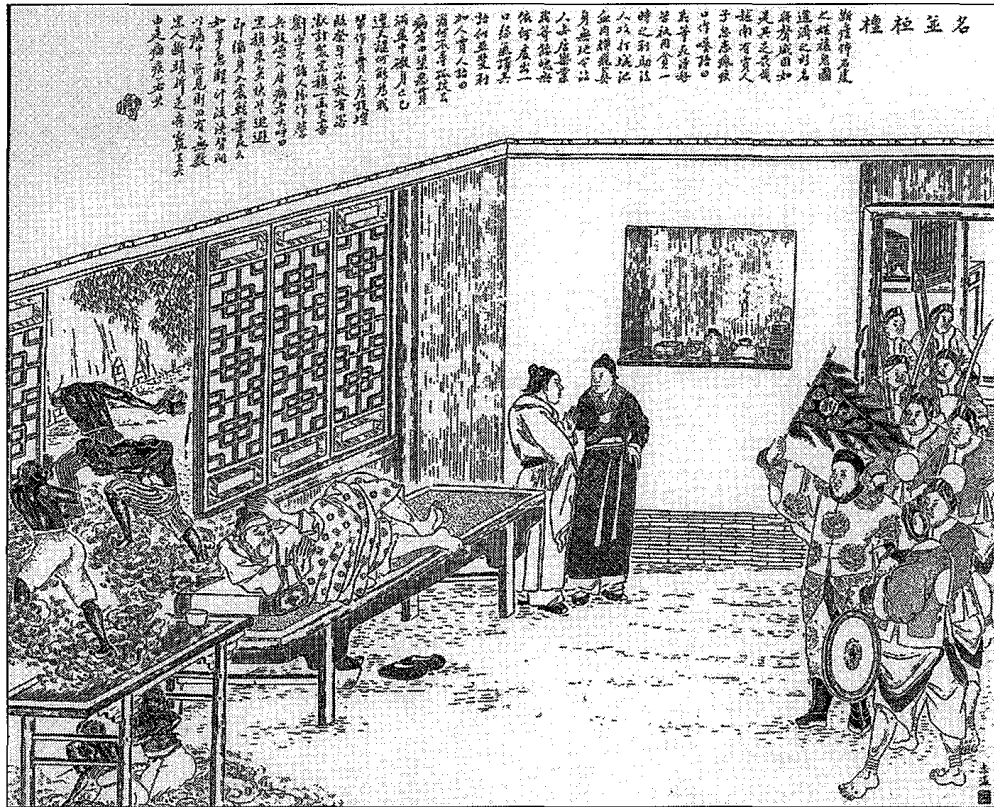
台湾戦役で敗れたのちも欽州の劉永福は、救国をめざすベトナム人の友人でありつづけた。劉永福は両親の墓を嗣徳帝と光緒帝の聖旨でかざり、同族のために劉氏祠堂をたて邸宅を三宣



【図3】「將軍出陣」(『点石齋画報』)

堂と名づけた。マンダリンとして当然のことである。しかし、理財の才は自己のみならず部下のためにも発揮された。黒旗軍兵士のなかには戦闘で命をおとした者や、帰還しても蓄財を失なった者も多かった。かれらと家族に対しての厚遇は、未亡人達をあつめて生活を保証したことで明らかなである。一九〇六年に日本を追われた潘佩珠がおとずれた時、阮光碧と反フランス運動を展開した阮善述は劉永福の庇護下で健在であった。住民達が「亡命してきた嗣徳帝」と誤認した阮善述と潘佩球は対面した²⁹。

さらに北圻には残留した黒旗軍のネットワークも存在した。すでに一八八五年の強制帰国の時点で唐景崧は、「劉永福から離反して自立した頭目」として十一名を列記している。その一人謝炳安は注目すべきである。その名前はフランス側にベトナム音で Ta binh yen と記録されているからである³⁰。黒旗軍の帰国とともにフランスは清朝と国境線確定作業にはいったが、作業は難航した。一八九三年の報告には「一八八七年から黒旗軍頭目 Ta binh yen が妨害しているために都龍の調査ができない」と記されている。時と場所そして名前的一致から考えて、両者は同一人、すなわち黒旗軍のベトナム・ネットワークの一部であろう。とすると潘佩珠や反フランス運動の同志がベトナムに潜入するさいに、清領はむろん国境をこえても劉永福の庇護下に入りネットワークをつうじて往来できた事実を推定できよう。



【図4】「名並桓檀」（『点石斎画報』）

最後に劉永福伝奇の一つ「アフリカ兵を撃退する黒旗」〔図4〕をとりあげよう。清仏戦争期の劉永福と黒旗軍の活躍を伝える上海情報は、台湾戦役にくらべて伝奇性をおびていない。そのなかで一八八九年の情報は例外である。内容は、富裕なベトナム商人の息子が難病にとりつかれアフリカ兵の亡霊に襲われ苦しんでいたのを、黒旗軍旗をもちだしてアフリカ兵の妄想を追い払ったというものである。記事は迷信にみちているとも言えるが、核心をもっている。フランス軍が黒旗軍打倒のために最後の手段としたのは、ゼフィールをふくむアフリカ部隊であった。劉永福の志、救国の心はアフリカ部隊に屈しないことを伝えたのが伝奇である。

そして越南光復会が欽州の劉氏祠堂で成立したのは、一九一二年であった。共和制をめざす越南光復会は、潘佩球が東遊運動の挫折をこえて踏みだした一歩であった。あたかも清朝最後の皇帝宣統が退位し、二千年以上におよぶ君主制が終わりをつげた年である。劉永福はマンダリンの軛から解き放たれた。もはやマンダリンも匪もない自由な共和国がうまれるなかで、劉永福は阮光碧から与えられたベトナムの心性をまもり救国の志を大きく結実させたといえよう。さかのほればタイバック起義に倒れた阮光碧の救国の志であり、さらにホー・チミンによってひきつがれる独立、自由の国ベトナムに孵化する卵であった。劉永福は、ベトナム解放運動が君主制から共和制へと成長

するにあたっての孵卵器の役割をはたすことで阮光碧の詩に唱和したのである。

小結

本稿では、マンダリン、『大南寔録』、劉永福伝奇を鍵として従来の劉永福評価——両属の傭兵から封建官僚へ——の再考をここらみた。「劉永福に救国の志を与えたのは唐景崧である」という説は、羅香林氏が一九三六年に批判しているにもかかわらず通行している⁽³²⁾。唐景崧に代わりうる人物を指摘できなかったことが、唐景崧説を延命させた原因であろう。本稿で考察したように、欧米研究者が反フランス運動の中心人物の一人として注目しているベトナム人マンダリン阮光碧こそが、劉永福を救国へと目覚めさせた人物である。

すなわち潘佩球の『越南亡国史』の「阮碧」は、劉永福の『劉永福歴史草』の「阮飛拳」唐景崧の『請纓日記』の「阮光碧」であり同一人物である。筆談でベトナム・マンダリンから情報を収集した唐景崧は正確に漢字表記している。ベトナムでは名前をよぶときに最後の一字をつかう。ゲン・クアンビツクの場合は、ビツクとなる。飛拳は碧のベトナム音を漢字で写したものである⁽³⁴⁾。ベトナム風の阮光碧の名前表記は、劉永福と潘佩球がともにビツクにいただいた親近感、敬愛を伝えているのでは

ないだろうか。

今後、『劉永福歴史草』『漁峰文集』『請纓日記』の正確な読みをつうじて清仏戦争期の阮朝、清朝の動向を解明して漢字文化圏の実態をさぐりたい。

注

- (1) 坪井善明『近代ヴェトナム政治社会史——阮朝嗣徳帝治下のヴェトナム一八四七—一八八三』(東京大学出版会 一九九二) 九五頁。以下、フランスおよび清の動向については坪井論文による。
- (2) 羅敏「中国関于戦後越南問題的認知与实践(一九四二—一九四六)」『歴史研究』二〇〇三—一五。
- (3) 張壯強『広西近代援越抗法戦争』(厦門大学出版社 二〇〇〇) 一八一—一三頁。
- (4) Mark W. McLeod, *The Vietnamese Response to French Intervention, 1862-1874*. Praeger, 1991. p. 97, 122, 129.
- (5) 『大南寔録正編』第四紀、卷六八：一〇 嗣徳三五年秋七月(慶応義塾大学言語文化研究所 一九七〇)
- (6) 『大南寔録正編』第四紀、卷五七：二七 嗣徳三〇年三月(同上)。
- (7) 『大南寔録正編』第四紀、卷五七：二四—二八 嗣徳三〇年三月(同上)。
- (8) 坪井善明「阮朝の滅亡と仏領インドシナの成立」『岩波講座東南アジア史』五(岩波書店 二〇〇一) 一一二頁。
- (9) 黄振南 白耀天標点『罕毓英集』前言(広西民族出版社 二〇〇〇)。
- (10) 唐景崧『請纓日記』卷二 一一b(上海古籍書店複印 一九七九)。劉

永福の人物像について『点石齋画報』をはじめ Dick de Lonlay、王韜等が相矛盾する複数の記事を残していることについては、別稿を予定。

(11) 羅香林輯校『劉永福歴史草』（正中書局 一九五七）一七五頁。羅香林氏は『請纓日記』が唐景崧の自己宣伝に傾いていることを指摘し、フランス運動への唐景崧の影響力を過大視することに疑問を呈している。

(12) 『請纓日記』卷三 三三三^a。

(13) Dick de Lonlay, *Au Tonkin 1883-85, 1889*, p. 227. 同書および『岑毓英集』には教民のフランス軍への協力が指摘されており、教民の動向の解明が黒旗軍の性格規定のために不可欠である。劉永福が少数民族とむすんで勢力を拡大したことは、武内房司「デオヴァンチとその周辺——シブソンチャウタイ・タイ族領主層と清仏戦争」（塚田誠之『民族の移動と文化の動態——中国周辺地域の歴史と現在』風響社 二〇〇三）を参照。

(14) 注8参照。

(15) 『大南寔録正編』第五紀 卷三：一五一—一七、二六一—二七 建福元年三月（慶応義塾大学言語文化研究所 一九七〇）。

(16) 『漁峰文集』の伝える阮光碧と劉永福が興化の「同心死守」を約したと、タイバック起義の経過、国書奉呈示等については別稿を予定。タイバックとは「西北」を意味しベトナム北部とラオスとの国境地帯で、タイ族、モン族が多く居住する。

(17) 後藤均平『日本のなかのベトナム』（すくらむ社 一九八〇）六六一—七四頁。

(18) 『漁峰文集』一九a。

(19) 小倉貞男『物語ヴェトナムの歴史——一億人国家のダイナミズム』（中央公論新社 一九九七）二七三頁。劉永福の義子でありのちにフランスに投降したデオヴァンチについては武内房司氏の前掲論文（注13）が示

唆にとむ。

(20) L. Girard, *Dix Ans de Haut-Tonkin, 1899*, p.139, 295, 298.

(21) *Ibid.*, p.200. ドック・グー達はムオン族から補給をうけていた。現代ベトナムにおける研究でも阮光碧からデ・キェウ、ドック・グーとタイバック起義が継承されたことが認められている。(Nguyen Kiac Vien, *Viet Nam A Long History. The Gioi Publishers, Ha Noi, 2004*, pp.150-151.) フランス軍のベトナム侵略とふかく関わっているパリ外国宣教会については、当時のベトナムについての同会の年次報告の研究が望まれる。

(22) 唐上意『中法戦争与張之洞』（暨南大学出版社 二〇〇四）一四五—一四八頁。

(23) 劉汝錫『劉永福——力挫帝國主義的伝奇性野戦英雄』（聯鳴文化有限公司 一九八一）九七—九八頁。

(24) 『虎臣入観』（『点石齋画報』四—二二八 大可堂 二〇〇三）光緒三十一年一月六日。

(25) 齊藤希史『漢文脈の近代——清末・明治の文学圏』（名古屋大学出版会 二〇〇五）九七—九八頁。

(26) 台湾戦役における劉永福については、拙稿「台南の劉永福——「奉旨勦滅倭寇」の黒旗」（『史苑』五二—二、一九九二）「民衆が見た植民地征服戦争・台湾——『風俗画報』と『点石齋画報』を中心に」（『史苑』六三—二、二〇〇三）を参照。

(27) 劉永福の公金横領問題が論文で言及されるようになったことには、台湾民主国評価問題ともからんで台湾の政治状況が反映している（張守真「乙未之役南台湾的抗日」（高雄市文献会 一九九二）。台湾民主国評価をめぐる中台間の政治的対立が研究の障害となっていることは、拙稿「『点石齋画報』にみる台湾戦役——劉永福伝奇を中心に——」（『饕餮』一二

二〇〇四) 参照。

(28) 「將軍出險」(『点石齋画報』一二一—一二七 大可堂 二〇〇三) 光緒二一年一月六日。

(29) 内海三八郎『ヴェトナム独立運動家潘佩球伝——日本・中国を駆け抜けた革命家の生涯』(芙蓉書房出版 一九九九) 二六一頁。広西壮族自治区通志館編・広西壮族自治区博物館修訂『中法戦争調査資料実録』(広西人民出版社、一九八二) 六一頁。

(30) 『請纓日記』巻一〇 四a。「中越境界画界委員主任塞爾維爾上校関于第二段境界的報告」蒙自 一八九三年六月一日(蕭德浩・黄錚編『中越境界歴史資料選編』下 社会科学文献出版社 一九九三) 九六二—九六三頁。一八八九年には『点石齋画報』が「名並桓檀」を掲載し、残留黒旗軍で抵抗戦をつづけていた魏名高父子がフランスに投降している(『中法戦争』七 四九一—四九二頁)。「中法戦争調査資料実録」(二五一頁)によれば魏名高が阮光碧の指揮下にあったことも明らかである。同書は唐景崧が「離反して自立した黒旗頭目」として名をあげる葉成林も反フランス運動をつづけたことを記す(二五四—二五六頁)。さらに一八九六年には劉永福が「旧党を招募した」という報告(『中法越南交渉档』七—二七〇二、二七〇六)が現れることから、黒旗軍ネットワークの存在が推定される。

(31) 「名並桓檀」(『点石齋画報』六一—七二 大可堂 二〇〇三) 光緒一五年八月二十六日。

(32) 中国における最近の研究は、『大南寔録』を使用して阮朝の動向を明らかにしているが、唐景崧評価は変わっていない(廖宗麟『中法戦争史』天津古籍出版社、二〇〇二年 一六三頁参照)。

(33) Helen B. Lamb, *Vietnam's Will To Live: Resistance To Foreign Aggression*

From *Early Times Through The Nineteenth Century*. Monthly Review Press., NY 1972. p. 120.

(34) ビックのベトナム音は bich、飛拳の中国音は *fei-quan* となるがベトナム音では phi-qu となり bich と通じる。『劉永福歴史草』の「阮飛熊」は阮述であることは羅香林氏が考証している(同書一六五—一六六頁)。